

# わが国の若手心理臨床家が抱える面接場面における困難の現状

## : 質的研究論文の文献検討

木村 友馨 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

木村 優香 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

### 要約

臨床心理士の有資格者数は右肩上がりであり、ここ最近では、毎年およそ 1,600 人以上の若手心理臨床家が誕生している。さらに、2018 年には、国家資格としての公認心理師が新たに輩出される予定である。こうした社会的背景をもとに、心理職に従事する者はその専門性や社会的責任がより一層問われることが予想され、若手心理臨床家の教育訓練の質の向上は喫緊の課題である。本論文では、若手心理臨床家の教育訓練の向上を図る上で欠かせない課題として、面接場面における若手心理臨床家が抱える困難に着目し、若手心理臨床家が感じている困難の現状と訓練の課題について整理することを目的とした。対象論文は、質的研究論文に限り、「心理臨床学研究」「カウンセリング研究」の掲載論文や、Google Scholar や CiNii、および Google 検索によって抽出された論文に、本学の修士論文を加えた計 11 本であった。それら文献を概観し、「セラピスト側の要因」、「クライアント側の要因」、「状況の要因」の 3 つの観点から文献検討を試みた。

**キー・ワード**: 若手心理臨床家、困難、教育訓練、文献検討

## I 背景と目的

### 1. はじめに

1988 年に臨床心理士資格認定協会による臨床心理士の資格認定が始まって以来、有資格者数は右肩上がりであり、2017 年 8 月現在、臨床心理士の資格取得者は 3 万人を超えている。また、ここ 5 年の間で、毎年およそ 1,600 人以上の若手心理臨床家が誕生していることに加え、2018 年には、新たに国家資格としての公認心理師が誕生する予定である。心理職に従事する者は、その専門性や社会的責任がより一層求められることはもちろんだが、今後、多くの若手心理臨床家を輩出していくうえで、その専門性や資質向上のために、職業的訓練の方法や目標を検討することは喫緊の課題と言えるだろう。

ところで、日本臨床心理士資格認定協会は、

臨床心理士の専門業務として、「臨床心理査定」「臨床心理面接」「臨床心理的地域援助」「それらに関する調査・研究」の 4 つを掲げている。これらの業務の一つである「臨床心理面接」にあたっては、各理論アプローチを背景に数々の心理療法が提唱され、これまで、多種多様な技法や介入を発展させてきた。それに伴い盛行した多くの心理療法の効果研究によれば、セラピスト側の要因が、クライアント側の要因に次いで、心理療法の効果を左右すると知られている。

したがって、「臨床心理面接」における心理臨床家の教育訓練では、心理臨床家の個人的要因と訓練効果との関係について知見を蓄積していくことは肝要である（金沢・岩壁、2006）。なかでも、心理臨床家が面接場面において感じる困難は、心理臨床家の教育訓練に関する研究に

において重要なテーマの一つであり、特に若手心理臨床家の訓練においては、欠くことができないトピックであると思われる。

## 2. 心理臨床家の職業的成長

心理臨床家の職業的訓練に重要な示唆をもたらした代表的な実証的研究として、本論文では、Skovholt & Rønnestad (1992) の職業的発達段階を挙げる。

Skovholt & Rønnestad (1992) は、大学1年生から大学院修了後40年を経たセラピストに対して面接調査を行い、8つの職業的発達段階を見出した(金沢, 2003)。金沢(2003)の訳を借りると、8つの各段階は、①一般常識で行動する段階(Conventional Stage)、②専門家としての訓練に移行する段階(Transition to Professional Training Stage)、③エキスパートを模倣する段階(Imitation of Expert Stage)、④条件的自立の段階(Conditional Autonomy Stage)、⑤探求の段階(Exploration Stage)、⑥統合の段階(Integration Stage)、⑦個性化・個別化の段階(Individuation Stage)、⑧高潔で欠けるところのない段階(Integrity Stage)となっている。

これらのモデルから、心理臨床家は、各段階を経て職業的に成長していくことがわかるが、若手心理臨床家を育てていく上で示唆に富んでいるのは、特に初期の段階と言えるだろう。

Rønnestad & Skovholt (2003) は、②専門家としての訓練に移行する段階(Transition to Professional Training Stage)は、専門的な訓練が始まる段階であり、やる気に満ちている一方で困難も大きいと説明している。例えば、専門的援助について学ぶことは骨が折れ、圧倒されてしまい、特定の理論や技法に頼るも、実際との違いを感じて自信を喪失し、やっていけるのか不安を感じたりする。

また、③エキスパートを模倣する段階

(imitation of Expert Stage) は、訓練が終わり、実習やインターンシップなどとして、実際にセラピストとして働き始める段階と説明している。この段階における主な課題は、専門家として基本的なことができるようになることである。だが、多くが自分自身に高い期待をし、失敗を避け、優れた心理臨床家になろうとする。完璧にこなすことにプレッシャーを感じるようになり、緊張が高く、リスクを避け、自主性に乏しいことが、共通してみられる特徴であると述べられている。

このように、各発達段階において、心理臨床家が抱える困難は変化する。若手心理臨床家特有の困難について理解するうえで、これらの発達研究は意義深いと思われる。

## 3. 心理臨床家が面接場面で抱える困難

心理臨床家が抱える困難に関しては、職業的ストレスや満足度の観点や志望動機などの観点(上野, 2013)など様々な視点から、研究がなされている。面接場面における心理臨床家が抱える困難に関する研究も、各研究者が独自の概念を用いてこれまで研究されてきた。その主な研究として、Davis et al. (1987) と Hill et al. (1996) の研究がある。

Davis et al. (1987) は、セラピストとして困難を感じる状況について話し合い、その困難の度合いを評定し分類を行ったところ、セラピストは、以下の困難を感じていることを明らかにした。①力不足(Incompetent): セラピストとしての能力に不十分さを感じる、②有害(Damaging): クライエントを傷つけたかもしれないと感じる、③技術的な困惑(Puzzled): どのように進めるのが相応しいのかわからない、④恐れを感じる(Threatened): クライエントから身を守らなければと感じる、⑤ラポートが築けない(Out of Rapport): クライエントとの関係性が築けないと感じる、⑥セラピスト

の個人的な問題 (Personal issues) : セラピストのプライベートな悩みが、セラピーを妨げているように感じる、⑦痛ましい現実／倫理的ジレンマ (Painful Reality/Ethical Dilemma) : 痛みを感じるが避けて通れない状況／何がもっとも倫理的か判断しきれない、⑧行き詰る (Stuck) : セラピーが行き詰まり、逃げ道がないと感じる、⑨妨害を受ける (Thwarted) : セラピストの治療努力をクライアントが進んで妨害していると感じる、の 9 つであった。

一方、Hill et al. (1996) は、セラピストが感じる「行き詰まり (impasses)」について着目し、8 名のセラピストに面接調査を実施している。

「行き詰まり」の内容としては、治療契約などにおけるクライアントとの不一致を認めている。例えば、クライアントがセラピストの介入や提案に対して拒絶したり、激怒したりすることなどである。

また、「行き詰まり」の背景要因としては、セラピストのミスや三角関係、転移、セラピストの個人的な問題を挙げている。

まず、セラピストのミスには 4 つの下位分類を認めており、①セラピストが強引すぎたり、非援助的過ぎること、②セラピストが慎重すぎたり、非指示的でありすぎること、③セラピストが技法を頻繁に変えすぎること、④セラピストがクライアントの見立てを誤ることを挙げている。

つづいて、三角関係は、第三者の存在が治療関係に割り込んでくることにより、クライアントが第三者とセラピストの間で板挟みになってしまうことを挙げ、転移としては、例えば、クライアントがセラピストを親のように思うことを挙げている。

最後に、セラピストの個人的問題が、「行き詰まり」と関係しているとし、4 つの下位分類を認め、①強いネガティブな情動や行動への苦手

意識、②生い立ちを背景とするセラピストの問題がクライアントの問題によって刺激される、③救済者幻想に引きこまれる、④私生活におけるストレスを報告している。

「行き詰まり」によって、セラピストは苛立ちを覚え、怒ったり落ち込んだり、あるいは、クライアントから傷つけられたと感じたり、自己効力感が下がることが指摘されている。また、セラピストは、「行き詰まり」への対処として、まず、クライアントと「行き詰まり」について話し合うとしている。つまり、「行き詰まり」を扱うことで、解釈を行ったり、治療関係について話し合うなどし、面接への動機付けを行おうとするのである。

だが、「行き詰まり」は、そのことについて良く振り返り、何がいけなかったのか明らかにしようとするとき、セラピストとしての自信を喪失させたり、終結してもつながり続けるほどに、クライアントに対する罪悪感を抱かせるなど、セラピストに長期的な影響をもたらすと報告している。

#### 4. 若手心理臨床家が面接場面で抱える困難

上述のように、面接場面において心理臨床家が抱える困難には、経験年数を問わないものもあれば、若手心理臨床家に特有の困難もあるだろう。

Farber & Heifetz (1981) は、心理面接における満足度とストレスの研究において、最もストレスフルなものとして、金沢・岩壁 (2006) の訳を借りると、「心理療法に集中するのに適さない労働条件」に加え、「心身の疲弊」、「治療関係において親密さと自制という両方が要求されること」の 3 つを挙げており、経験豊富な心理臨床家よりも、若手の方が、より心身の疲弊を感じることを報告している。

また、これら 3 つのストレスのうち、「セラピストとして限界を超え心身ともに疲弊を感じ

ること」に関して、4~10年、11年~40年の臨床経験を持つセラピストよりも、1~3年の初心者セラピストが、よりストレスを感じていることを報告している。

さらに、Rodolfa et al. (1988) は、複数の機関における169名の専門家、80名のインターン生、30名の訓練生のおよそ300名を対象に、面接中とスーパービジョンで体験するストレスについて熟練心理臨床家と訓練生とを比較検討したところ、専門家より実習生が、実習生より訓練生の方が、よりストレスを感じていることを明らかにした。

これらから、若手心理臨床家が特に感じる職業的ストレスが存在していると言える。Skovholt & Rønnestad (2003) は、初心者セラピストが抱えるストレスとして、7つを挙げている。①専門家としての能力に対する強烈な不安と恐怖 (Acute Performance Anxiety and Fear), ②専門家としてふさわしいかどうか監督者の精査に晒されること (Illuminated Scrutiny by Professional Gatekeepers), ③クライアントとセラピストの感情の境界が曖昧であったり、柔軟性に欠けること (Porous or Rigid Emotional Boundaries), ④専門家としての脆さや不完全さ (The Fragile and Incomplete Practitioner self), ⑤学んだ概念を実践で応用する難しさ (Inadequate Conceptual Maps), ⑥将来への過剰な期待 (Glamorized Expectations), ⑦支持的で肯定的な指導者がいないこと (The Acute Need for Positive Mentors) を挙げている。

一方、若手心理臨床家が、面接場面で感じている困難に着目した研究としては、まず、Steane et al. (2007) がある。Steane et al. (2007) は、訓練セラピストの面接での行き詰まり体験について質的に調査している。それによると、訓練生は、行き詰りを感じると、セッション中にその場でどのようにして良いのかわからず、

ネガティブな感情を抱くことがわかった。さらに、訓練生は、行き詰りを失敗と捉えることを明らかにした。

また、The'riault & Gazzola (2010) は、これまで様々な研究において、心理療法を行う上で危険をもたらすものとして報告されてきた、セラピストとしての効果性に対する自信喪失や不安、不確実さを「力不足の感覚 (feeling of incompetence ; FOI)」と定義し、10名の初心者セラピストにインタビュー調査を実施している。初心者セラピストの10名中9名が、FOIに馴染みがあり、心理療法を振り返る上で欠くことができないものであるとした。また、FOIは、その場限りの対処の容易な軽いものから、自己評価にも影響をもたらす深刻なものまであり、初心者セラピストがFOIを抱く背景として、①誰にでもある限界によるもの、②知識や経験、訓練の不足によるもの、③面接経過で生じる問題によるもの、④プレッシャーによるもの、⑤セラピストの個人的要因によるものの5つを報告している。各背景について、以下にまとめる。

#### ① 誰にでもある限界によるもの

これは、誰にでもある限界があり、全てはできないがためにFOIを抱くのだという見解であり、強いては、FOIは免れないものであると述べられている。中には、FOIによって、かえって謙虚になることができ、専門家として、個人として成長しようとする動機づけになるとし、価値を見いだす語りもあったことが報告されている。

#### ② 知識や経験、訓練不足によるもの

FOIを感じる背景の一つとして、知識不足、経験不足、訓練不足が挙げられている。なお、初心者セラピストは、多くの技術や介入方法を知っていれば、FOIを感じなくてすむという考えを抱きがちであると指摘されている。

#### ③ 面接経過で生じる問題によるもの

具体的には、まず、治療関係での重大な障害があるときを挙げている。面接経過の進捗が全

くなかったり失敗した時など、すべての進捗やクライアントの反応の責任を自身に帰属させ、自身の役割に疑問を感じるとしている。また、面接経過をポジティブに捉えていたにもかかわらず、結果が良くなかったときや傾倒していた理論を用い、失敗したときに FOI を感じるとしている。さらに、特定のクライアントの特徴（動機の低さ、もろさ、激しい情動、攻撃性、強い苦痛を示す、など）も背景要因として報告している。

また、FOI がさらなる FOI を呼ぶことが明らかにされており、FOI に対処しようとすればするほど、敏感になったり、不安や自信喪失を強めてしまったりする。加えて、FOI に対処するために、特定の理論モデルに固執することは、FOI を一層引きやすくなると述べている。

#### ④ プレッシャーによるもの

プレッシャーには、内発的なものと外発的なものとがあり、内発的なものは、自身に課した、もしくは、感じられる数々の責務を挙げている。外発的なものとしては、第三者の存在によるもの、紹介元によるもの、スーパーバイザーによるものなど、評価的機能を持った存在が、FOI の背景となっていると指摘している。

#### ⑤ セラピストの個人的要因

セラピスト自身の弱さや完璧主義、評価過敏などに加え、セラピストの個人的価値観が、FOI から逃れられなくしていることが指摘されている。例えば、クライアントがセラピストの価値観を裏切る行動をすることで、セラピストは客観的になれず、治療的距離を保てなくなり、自信を喪失することを示している。また、セラピストの未完了の体験が、クライアントによって刺激されることで、境界があいまいになり、不確かさを感じるようになることを報告している。

### 5. 若手心理臨床家の訓練教育

以上のように、若手心理臨床家には、彼ら特

有の困難があると考えられるが、若手心理臨床家にふさわしい訓練教育に関して、Rønnestad & Skovholt (1993) と Steano et al. (2007) の見解を例にあげる。

Rønnestad & Skovholt (1993) は、訓練生や初心者セラピストへのスーパービジョンは、きっちりと構造化され、指導的であり、技術に焦点を当てるのが一般的であるが、初期においては、特に内省を促すことが重要であるとしている。また、訓練が始まった段階においては、不安についてや、モデリングが功を奏しているか否かを検討するとよいと述べている。さらに、訓練生・初心者セラピスト両者にとってスーパービジョンが効果的になるのは、バイザーとバイジーとの関係の質が重要であると述べている。一方、Steano et al. (2007) によれば、訓練生側は、スーパービジョンに対して肯定や受容を求めており、スーパービジョンによって自己への気づきが高まると報告している。

### 6. 本研究の目的

これまで、海外の文献を中心に若手心理臨床家が抱える困難についておおまかに概観したが、わが国の若手心理臨床家が抱えている困難とはどのようなものだろうか。冒頭に述べた社会的背景や望まれる教育訓練の向上に鑑みても、わが国の若手心理臨床家が抱える困難について、熟慮する必要があるだろう。

本論文は、わが国における若手心理臨床家の心理面接場面における葛藤や困難さをこれまでの諸研究を概観し、困難の現状と彼らが抱える課題について把握することを目的とする。そのうえで、対象論文を質的研究論文に絞ることで、若手心理臨床家が感じている困難の内容をより詳細に理解することを目指す。

なお、面接場面において初心者が抱えやすい困難についてこれまでの知見をまとめることは、今後の若手心理臨床家の訓練への一助となると

期待する。

## II 方法

### 1. 対象論文

対象論文は、質的研究論文に限り、「心理臨床学研究」「カウンセリング研究」に掲載されている論文を対象にした。それらに加え、主に学術用途での検索を対象とし、論文、学術誌、出版物の全文やメタデータにアクセスが可能な Google Scholar や CiNii、および Google も併用した。また、本学の修士論文も対象にした。

### 2. 抽出方法

検索に際し、「心理臨床学研究」「カウンセリング研究」においては、「臨床家」、「セラピスト」、「治療者」などをキーワードにバックナンバー検索を行い、本研究の目的に合っている研究論文のみをカウントした。また、Google Scholar と CiNii においては、「心理臨床家、セラピスト、カウンセラー」と「若手、初心者、初学者、訓練生」をキーワードとして組み合わせて検索し、本研究の目的に沿わない文献は含めなかった。結果、心理臨床家の困難に関する研究論文は 16 本抽出され、そのうちの 11 本が若手心理臨床家の困難に関する質的研究論文であった。

## III 結果

抽出された 11 本の質的研究の一覧は、表 1 のとおりである。抽出された 11 本の質的研究論文のそれぞれの分析結果をもとに、若手心理臨床家が抱える困難の内容を「セラピスト側の要因」「クライアント側の要因」「状況の要因」の 3 つの観点からまとめた。

### 1. セラピスト側の要因

セラピスト側の要因については、ほとんどの文献で取り上げられていることから、困難を経験する若手心理臨床家にとって重要な問題であるといえる。

山口 (2010 ; 2011) はセラピストとしての根底的疑惑、どうすればいいのかわからない戸惑い、うまくできないことへの否定的感情といったセラピストが面接に向き合う自信のなさを取りあげている。同じく川島 (2006) も、セラピストとしての適性への不安や当惑を困難のひとつとして挙げている。若手心理臨床家は自身の未熟さを自覚しているため、クライアントの前でセラピストとして向き合うことに不安や戸惑いを感じていることが示唆された。また、青木 (2010) による、クライアントに情緒的に巻き

表 1. 若手心理臨床家の困難に関する質的研究論文一覧

No	著者(年)	タイトル
1	阿部(2009)	心理臨床初心者の否定的・消極的感情についての一研究
2	青木(2010)	臨床心理面接ケース担当実習に関する一考察
3	石谷(2008)	大学院生による模擬面接体験の分析～臨床心理士候補生が面接場面で陥りがちな困難と臨床教育の課題についての一考察～
4	川島(2006)	初心者臨床家の職業的成長について－心理的葛藤に関する質的分析
5	喜田ら(2006)	心理臨床におけるロールプレイ実習の基礎的研究――初学者は、どのように行き詰まるのか
6	森(2016)	初心者の心理臨床家が力不足を感じる体験
7	村井ら(2013)	初回面接における訓練セラピストの困難とその対応：継続事例と中断事例の比較検討
8	西原(2001)	セラピストの初期の段階における自己効力感(平成12年度発達臨床学専攻修士学位論文概要)
9	上倉ら(2016)	心理面接における初学者の不安への対処と乗り越え方および成長―複線径路・等至性モデル(TEM)による分析
10	山口(2010)	初心者セラピストにおける「居心地悪さ体験」の探索的検討――内容と変化のきっかけに着目して
11	山口(2011)	初心者セラピストにおける「居心地悪さ」体験とその変化

込まれることや、阿部（2009）による、セラピストの精神的苦悩が想起されることといった、セラピストの面接時の動揺も若手心理臨床家にとっての困難であることが示唆された。このように、自身の内面で起こるさまざまな感情の動き、乱れに慣れない若手心理臨床家は、これらによって面接が妨げられていると感じて困難を体験していることが特徴であった。さらに阿部（2009）は、このような慣れない面接での揺らぎやすさゆえに、セラピストの日常的な疲労が面接場面に持ち込まれることも困難の一つであると述べている。こういった多くのネガティブな感情や心の動きは、森（2016）が指摘するように、漠然としたできなさとして根付いてゆき、若手心理臨床家がセラピーに集中することが妨げられるのだと考えられる。

また、村井ら（2012）が面接場面での対話の途切れや内容の深まらなさを指摘していたり、喜田ら（2006）が返答の仕方やクライアントの話の整理といった具体的な介入方法が定まらない停滞を挙げていたりしている。セラピー経験が少なく熟練臨床家よりも知識や技術が不足している若手心理臨床家は、こうした展開しないセラピーが続くことで困難を経験する。そしてこうした停滞した状態から抜け出せずに、クライアントの内面がわからず、共感的な姿勢を示すことができないがゆえに、石谷（2008）が指摘する、つながれないといった困難に至る経験をしている。

さらに、これまで述べたような知識・技術の不足による困難が存在する一方で、知識を習得したがゆえに、それを正しく実行しようという気持ちに囚われて困難を経験することも若手心理臨床家の特徴である。青木（2010）によると、若手心理臨床家は失敗や間違いを回避するため、面接の枠組みを侵さず面接技法を忠実に遂行することに夢中になり、目の前のクライアントに合わせた行動をとることができなくなる傾向に

ある。そしてさらに、石谷（2008）や上倉ら（2016）がとりあげたように、クライアントに対して違和感を持ったとしても、クライアントの言葉や行動すべてをそのまま受け入れたり、過度にクライアントに注目してしまうことも、若手心理臨床家が抱えているセラピストとしての役割に囚われた困難であるといえる。

## 2. クライアント側の要因

若手心理臨床家が困難を経験することにはセラピスト側の要因だけではなく、クライアント側の要因によりセラピーでの介入が難しくなることもある。

クライアントがセラピーに臨む際、必ずしもクライアント自身の意思で来談しているわけではない。山口（2010；2011）は、家族や学校、職場からの強い勧めによって来談しているクライアントを挙げており、このような場合、クライアントの来談動機や継続の意思が希薄であることも少なくない。こうしたクライアントの動機づけが低い状態は、若手心理臨床家にとって居心地の悪い空間となり困難と感じられやすい。面接場面においても同様に、阿部（2009）らが挙げたように、クライアントが自身の体験や感情を語ることに抵抗を示したり、セラピストがクライアントの内面に近づこうとしたりすると、逃げの姿勢を示すような状態も困難と感じられやすいといえる。また、クライアントがセラピストに対して攻撃性を向けてきたり否定的に評価したりといったネガティブな言動が感じられたとき、若手心理臨床家はクライアントに向き合い続けることに困難を感じてしまうのである。

そして、このような非協力的なクライアントの姿勢とは反対に、喜田ら（2006）が指摘しているような、クライアントのセラピーへのニーズの大きさが、若手心理臨床家にとって重荷となり、それを困難と判断することもある。セラピスト自身が焦点を当てるべき事柄の多さから、

その問題の大きさに気が付く場合もあれば、クライアント側がセラピーに対して大きな期待を持っているためにニーズが膨らみ、問題が大きく感じられる場合もある。

### 3. 状況の要因

最後に、セラピストとクライアントを取り巻くセラピーの環境や状況が困難の要因となることを挙げる。

セラピーを行う環境や状況は、必ずしも若手心理臨床家が思い描いているものと一致しているわけではない。山口 (2010; 2011) は前回の面接で味わった雰囲気と今味わっている面接の雰囲気にギャップがあると感じることで、セラピストが違和感を抱くことも困難の一つであると指摘している。また、同じく山口 (2010; 2011) が挙げているような親子合同面接など、セラピストとクライアント以外の第三者がいる環境におかれることも、若手心理臨床家は動きにくさを感じ、困難の一つであるといえる。

そして、阿部 (2009) や西原 (2001) が挙げているように、スーパービジョンやケースカンファレンスなど、外部からのサポートが不足していることも、若手心理臨床家が面接場面で困難を強く感じる要因となりうる。

## IV まとめ

以上の結果を見ると、わが国の若手心理臨床家が抱える困難として挙げられているのは、セラピストとしての役割への疑惑、知識不足や技術不足といった面接自体への不慣れさ、面接の固定的イメージから逸脱した状況への困惑であり、冒頭で概観した Skovholt & Rønnestad (2003) や Steano et al. (2007), The'riault & Gazzola (2010) らの海外の先行研究に見られる要因にも共通している。

だが、わが国の若手心理臨床家が面接場面において抱えるさまざまな困難の内、最も注意を

払われるべきものは、セラピストという役割への囚われや役割として不十分なのではという疑惑であると思われる。見てきたように、面接での困難には、「セラピスト側の要因」だけでなく、「クライアント側の要因」も「状況による要因」もある。The'riault & Gazzola (2010) は、FOI には、その場限りの対処の容易な軽いものから自己評価にも影響をもたらす深刻なものまであるとしたが、本論文における「クライアント側の要因」「状況の要因」は、前者に当てはまると思われる。これらの困難に対しては、「支持的で肯定的な指導者 (Skovholt & Rønnestad, 2003)」によるスーパービジョンやケースカンファレンスなどが重要なのではないだろうか。一方、本論文における「セラピスト側の要因」は、後者にあたると考えられる。「セラピスト側の要因」によるものは、よりセラピストとしての職業的アイデンティティを揺るがすものであり、バーンアウトに繋がりやすいもののように見受けられる。したがって、若手心理臨床家の面接場面における困難の中でも、特に理解の必要な内容であると考ええる。

若手心理臨床家は、面接において、内面でさまざまな感情が動き揺れるものの、それをどうしていいのかわからないがゆえに、面接に集中できない状況があるように思われる。つまり、セラピスト自身の内面で起こることへの対処のできなさが困難さを喚起しているように推察される。

Rønnestad & Skovholt (1993) は、スーパービジョンに関して、初期においては、特に内省を促すことが重要であるとしている。だが、Hill et al. (1996) が、「行き詰まり」について良く振り返り、何がいけなかったのか明らかにしようとするほど、セラピストとしての自信喪失につながると報告し、また、The'riault & Gazzola (2010) も同様に、FOI について考えれば考えるほど FOI を招くと報告した。わが



国の若手心理臨床家においても、面接内での感情の揺れやうまく行かないことに対する否定的感情が、職業的アイデンティティを揺るがしていると推察されるため、スーパービジョンにおいて、内省の促し方の如何によっては、内省すればするほど、セラピストとしての力不足感をかえって喚起してしまう可能性も否めない。

さらに、知識や技術の未熟さゆえに面接が思うように深まらないことや、失敗することを恐れ、面接の枠や技法に固執することによる行き詰まりが加わることで、一層セラピストとしての役割への疑惑を促していることも推察される。The'riault & Gazzola (2010) は、面接の進捗やクライアントの反応などの原因を全て自身に帰属させ、自身の役割に疑問を感じるとしたが、わが国の若手心理臨床家においても、同様のことが言えそうである。また、初心者セラピストのストレスの一つとして、Skovholt & Rønnestad (2003) は「専門家としての能力に対する強烈な不安と恐怖」を挙げているが、わが国の若手心理臨床家も、自身の経験不足を自覚するがゆえに、自身のセラピスト役割としての効果性に疑惑を抱えやすいことが想像される。

以上より、わが国の若手心理臨床家の面接場面における困難について概観したが、中でもセラピスト役割への囚われや疑惑に関して、教育訓練を検討するうえで特に注目されるべき要素であると考ええる。

最後に、文献検討をする中で、若手心理臨床家の困難についての研究は、その大半が若手心理臨床家自身による研究であり、熟練した臨床家から見た若手心理臨床家の困難に関する研究論文は少ないことがわかった。ここからも、若手心理臨床家にとって、自身の面接場面での困難は大きな関心の対象であることがうかがえる。だが、実証的な研究は少ない印象であり、今後さらなる研究が期待される。また、今後の展望として、まず、本論文で概観してきたような若

手心理臨床家自身の振り返りに加え、熟練した心理臨床家による客観的示唆は、若手心理臨床家の成長において重要な指針を与えると思われる。例えば、熟練した心理臨床家の体験と比較することで得られる示唆は、若手心理臨床家自身が、何をどのように伸ばせばいいのか、あるいは、どのような部分にサポートを特に受けるべきなのかを理解するうえでも有意義であるだろう。また、多くの論文が、若手心理臨床家の面接場面における困難について広く調査していたが、今後は、「セラピスト役割にまつわる困難」などのように、より焦点化して検討していくことが望まれる。若手特有の困難が一層明確になることは、若手心理臨床家が困難を乗り越え、職業的に成長していくためのより効果的な教育訓練の発展に寄与するであろう。

<付記>本論文の執筆にあたり、ご多忙の中ご指導を賜りました岩壁茂先生、石丸怪一郎先生に厚く御礼申し上げます。

## 文献

- 青木 佐奈枝 (2010). 臨床心理面接ケース担当実習に関する一考察 東京成徳大学臨床心理学研究, 10, 28-39.
- 阿部 泉 (2009). 心理臨床初心者の否定的・消極的感情についての一研究 弘前大学大学院教育学研究科学校教育専攻学校教育専修修士論文
- Barry A. Farber & Louis J. Heifetz (1981). The satisfactions and stresses of psychotherapeutic work: A factor analytic study. *Professional Psychology*, 12, 621-630.
- Clara E. Hill & Elizabeth Nutt-Williams, Kristin J. Heaton, Barbara J. Thompson, Renee H. Rhodes (1996). Therapist Retrospective Recall of Impasses in long-term Psychotherapy: A Qualitative Analysis. *Journal of Counseling Psychology*, 43, 207-217.
- De Stefano, J., D'iuso, N., Blake, E., Fitzpatrick, M., Drapeau, M. & Chamodraka, M. (2007). Trainees' experiences of impasses in counselling and the impact of group

- supervision on their resolution: A pilot study, *Counselling and Psychotherapy Research*, **7**, 42-47, DOI: 10.1080/14733140601140378
- 石谷 真一 (2008). 大学院生による模擬面接体験の分析—臨床心理士候補生が面接場面で陥りがちな困難と臨床教育の課題についての一考察—心理相談研究, **9**, 3-18.
- Jhon D. Davis, Robert Elliot, Marcia L. Daivis, Marc Binns, Valerie M. Francis, James E. Kelman & Thomas A. Schröder (1987). Development of a taxonomy of therapist difficulties: Initial report, *British Journal of Medical Psychology*, **60**, 109-19, DOI:10.1111/j.2044-8341.1987.tb02720.x
- 金沢 吉展 (2003). 臨床家のための 1 冊『The Evolving Professional Self ---Stage and themes in therapist and counselor development』(専門家としての自己の発展—セラピストとカウンセラーの発達段階および発達上のテーマ) 臨床心理学, **3**, 291-294.
- 金沢 吉展・岩壁 茂 (2006). 心理臨床家の専門家としての発達, および, 職業的ストレスへの対処について: 文献研究 明治学院大学心理学部付属研究所紀要, **4**, 57-73.
- 川島 由布 (2006). 初心者臨床家の職業的成長について—心理的葛藤に関する質的分析—お茶の水女子大学大学院人間文化研究科発達社会科学専攻発達臨床心理学コース修士論文
- 喜田 裕子・内沢 沙紀子 (2006). 心理臨床におけるロールプレイ実習の基礎的研究—初学者は, どのように行き詰まるのか—富山大学人文学部紀要, **45**, 13-29.
- 森 美和子 (2016). 初心者の心理臨床家が力不足を感じる体験—お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科発達臨床心理学コース修士論文
- 村井 亮介・岩壁 茂・杉岡 品子 (2013). 初回面接における訓練セラピストの困難とその対応: 継続事例と中断事例の比較検討—心理臨床学研究, **31**, 141-151.
- 西原 ゆき (2001). セラピストの初期の段階における自己効力感 (平成 12 年度発達臨床学専攻修士学位論文概要) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要—心理発達科, **48**, 397-398.
- Rodolfa, E. R., Kroft, W. A., & Reilley, R. R. (1988). Stressors of professionals and trainees at APA-approved counseling and V.A. Medical Center internship sites. *Professional Psychology: Research and Practice*, **19**, 43-49.
- Rønnestad, M. H. & Skovholt, T.M. (1993). Supervision of beginning and advanced graduate students of counselling and psychotherapy, *Journal of Counselling and Development*, **71**, 396-405.
- Rønnestad, M. H. & Skovholt, T. M. (2003). The journey of the counselor and therapist: Research findings and perspectives on professional development. *Journal of Career Development*, **30**, 5-44.
- Skovholt, T. M. & Rønnestad, M. H. (1992). Themes in Therapist and Counselor Development, *Journal of Counseling & Development*, **70**, 505-515.
- Skovholt, T. M. & Rønnestad, M. H. (2003). Struggles of the novice counselor and therapist, *Journal of Career Development*, **30**, 45-58.
- Thériault A. & Gazzola N. (2010). Therapist Feeling of Incompetence and Suboptimal Processes in Psychotherapy. *J contempl Psychother*, **40**, 233-243, DOI 10.1007/s10879-010-9147-z
- 上倉 安代・齊藤 翔悟・佐藤 真理奈・野村 規雄・入軽井 悦子 (2016). 心理面接における初学者の不安への対処と乗り越え方および成長—複線径路・等至性モデル (TEM) による分析—立正大学臨床心理学研究, **14**, 41-54.
- 上野 まどか (2013). 心理臨床家の動機と心理臨床活動における困難および満足感との関連—志望動機のタイプ「苦悩型」と「消極型」に着目して—明治学院大学大学院心理学研究科提出博士論文.
- 山口 裕也 (2010). 初心者セラピストにおける「居心地悪さ体験」の探索的検討—内容と変化のきっかけに着目して—弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, **7**, 19-27.
- 山口 裕也 (2011). 初心者セラピストにおける「居心地悪さ」体験とその変化—弘前大学大学院教育学研究科学校教育専攻学校教育専修臨床心理学分野修士論文